

## 陸と海のシルクロード

ユーラシア大陸の内陸部における交易路は、「草原の道」と「オアシスの道」が発達する。

「草原の道」は、匈奴（最盛期 前3世紀末）、突厥（最盛期6世紀中ごろ～8世紀中ごろ）、ウイグル（840年のウイグルの西走）など騎馬遊牧民の活躍により陸路のネットワークが形成され、のちにモンゴル帝国の成立で完成された。

「オアシスの道」は、別名「シルクロード（絹の道）」といわれ、ペルシア帝国のアケメネス朝の進出（前550年～前330年）、アレクサンドロス大王の東方遠征（前334～前323年）、武帝の西域進出（前2世紀中ごろ）、唐の西域経営（7世紀全盛）で開かれていく。ソグド商人は、ソグディアナ（現在のウズベキスタンの一部）の都市サマルカンドを拠点に、ラクダを使用する隊商交易で活動（5～9世紀）した。

また、イスラーム帝国の拡大による中央アジア進出（7世紀）以降は、ムスリム商人が陸路と海路を並行して活躍した。ダウ船が往来する海の道が形成されると、広大な地域を交易の交流圏とすることができるようになり、これを「海域世界」という。

16世紀以降は、ヨーロッパ資本主義による世界経済の一体化がすすみ、インド洋、地中海、東アジア周辺に経済的に独立性の高い海域世界、交易圏が存在していった。これらの各地域、また地域相互のネットワークのなかで、文化交流を展開しながら多用な生活様式、美的様式が花開いていった。